No. 128 2017. 10

（株）よかネット

NETWORK
「ぶぜん未来カフェ」を開催しました
～高校生が考える豊前市の将来像～ ---- 2
震災から 13 年新潟県長岡市山古志地域を巡る ---- 3
第 126 回地域ゼミ報告
「不動産業から家主へ」買取り運用による博多町家再生の取り組み ---- 6
第 127 回地域ゼミ報告
地震で被災したマンションの維持管理のススメ方とは？ ---- 8
皆様から寄せられた「よかネット」へのご意見、近況など ---- 12

見・聞・食
旧旅館をコンバージョン～「唐津市子育て支援センター」がオープンして 5 ヶ月が経ちました～ ---- 13
福岡市市民総合防災訓練（東区会場）に参加
～福岡県建築士会にて紙管間仕切りを設置～ ---- 16

近況
朝倉市の災害ボランティアに行ってきました ---- 18
100 円ショップ持出品コンテストをやってみる ---- 19
小倉祇園は太鼓だけではない。平松御神輿祭に参加してきました ---- 21

書評
「実録　交渉の達人－国際標準化戦争秘録－」 ---- 23
「あなたのいるところが仕事場になる」 ---- 23

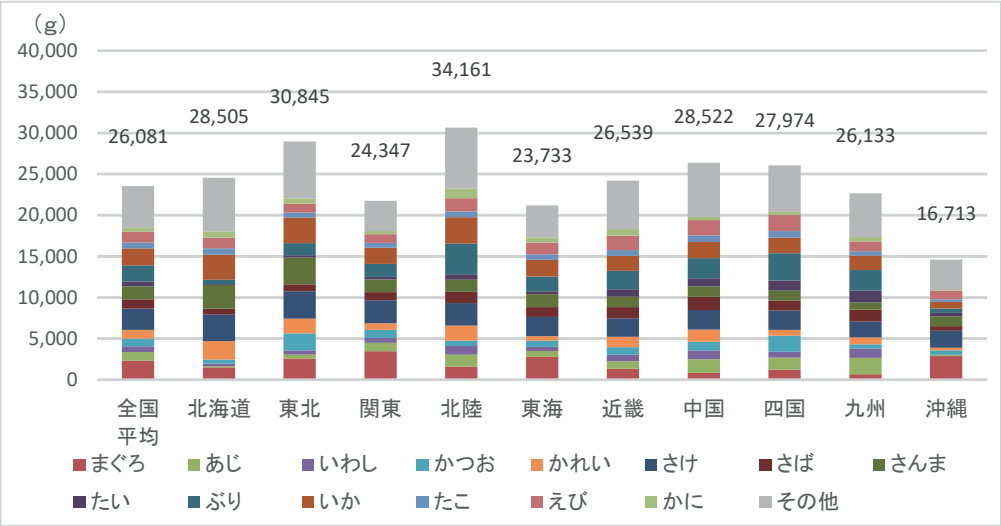
●魚消費は食文化～九州はブリ、イワシ、沖縄はマグロ、サケを多く食べている～

基本的に鮮魚は地場消費であったが、冷凍・冷蔵や輸送技術の飛躍的な発達によって地場消費の傾向は薄れてきている。また、鮮魚の消費量は年々減少傾向にあり、その購入傾向も変化をしているものの、家計消費をみると現在でも地域の食文化の特徴が読み取れる。

年間の世帯当たり消費量をみると北陸（34.2kg）、東北（30.8kg）の消費量が大きく、九州（26.1kg）、沖縄は北陸の半分以下の消費量（16.7kg）である。このうちマグロ、サケが 3 割近くを占めており、偏った魚消費の地域といえる。ちなみにタイの消費量を見ると、九州は全国で消費量が最も多く、北陸の 2 倍以上を消費している。

なお、九州の県庁所在地の消費量では、長崎市が約 28kg と最も多く魚を食べており、その他の魚も 8kg と高く、色んな魚種を食べていると推測される。福岡市は約 23kg で佐賀市に次いで 3 番目となっている。

表　魚消費に見る食文化　全国　（平成 26 年家計調査年報 2 人以上世帯、世帯当たり購入量（g））



「ぶぜん未来カフェ」を開催しました ～高校生が考える豊前市の将来像～

櫻井　恵介

今年度、豊前市の第５次豊前市総合計画後期基本計画策定のお手伝いをしています。

この後期基本計画は、前期基本計画に続き、市が施策を実行していくための５年間の計画なので、今後のニーズを把握し、現状と課題を分析したうえで、計画をつくっていく必要があります。

そこで市民がこれからの豊前市に何を必要としているか、また、どのようなことを望んでいるかを把握するため、「ぶぜん未来カフェ（以下、未来カフェ）」を開催しました。今回の未来カフェは、将来の豊前市を担っていく若い世代の意見を聞き、施策に反映させていくことを目的として、福岡県立青豊高校にご協力いただき、ワークショップ形式で実施しました。

当日は３年生 49 名の参加があり、最初はワークショップという慣れない手法に戸惑いもあるようでしたが、すぐに侃侃諤諤、あっという間の３時間でした。

今回はその時の様子をご報告します。

●もしもあなたが市長になったら・・・

今回の未来カフェでは８班に分かれ、「もしも私が市長だったら・・・こんなまちにする！」をテーマに、話し合いを進めました。

グループにわかれ、まずは市長（＝意見のまとめ役、発表者）を選出。市長が決まると次は話し合うテーマを選びます。テーマは豊前市総合計画で掲げられている５つの目標から、各班で興味・関心のあるものを１つ選んで検討を進めました。テーマ選択は「安全で住みよい環境のまちづくり」が２班、「活力と賑わいを創出するまちづくり」が３班、「誰もが健康で幸せに暮らせるまちづくり」が３班という結果となりました。それぞれの班でテーマについて選んだ理由を尋ねると、やはり自分たちが生活している中で課題や問題を認識しているからという理由が多く、「生涯学習」や「市民協働」については普段意識することが少なく検討テーマに選びづらいということがあったようです。

表　豊前市総合計画における５つの目標

①安全で住みよい環境のあるまちづくり
②活力と賑わいを創出するまちづくり
③誰もが健康で幸せに暮らせるまちづくり
④いつまでも生きがいを持って学べるまちづくり
⑤市民との協働によるまちづくり

●豊前市の「良い点」「悪い点」？

テーマが決まると、それをもとに豊前市における「良い点」「悪い点」について自由に話し合いをしてもらいました。

「良い点」として挙げられていた意見としては、「自然の豊かさ」や「食の豊かさ」、「災害の少なさ」に加えて、「高齢者にとって住みやすいこと」といった経験からだけではない客観的な意見や、神楽に代表されるような「歴史・伝統文化があること」も挙げられていました。

一方で、「悪い点」として挙げられていたのは、「商業・娯楽・公益施設の少なさ」、「交通の不便さ」、「（特に夜間の）防犯面への不安」といった自分たちの生活に直結した意見から「少子高齢化の進行」、「空き家・空き地の増加」、「担い手不足」、「（人を呼び込むための）魅力がないこと」等、幅広い意見が挙げられました。

●高校生からの政策提言

豊前市の「良い点」「悪い点」が整理できると、次はその内容について、「市長」として、今後どのようなことをしたらよいか、具体的なアイデアを話し合ってもらいました。

出てきたアイデアでは、「施設整備」に関連する意見が特に多く出ていましたが、単に必要な施設を整備するといった意見だけではなく、豊前市の強みである「自然」を活かした公園整備を行い、そこで地元産品を使ったレストランを運営するといった複合的な提案もみられました。また、それ以外でも、ボランティア等によ

表　各班の施策の概要

1班	「医療施設」「保育施設」「夜間の安全」という3つの柱に基づく政策
2班	「自然が多い」「高齢者が住みやすい」「災害が少ない」「商業施設が少ない」という豊前市の特徴を踏まえた政策
3班	「多くの若者　元気な高齢者」をテーマにした政策
4班	「自然」「住みやすさ」をキーワードとし、現状を踏まえ具体例まで踏み込んだ政策
5班	「世代を越えたまちづくり」をテーマとし、費用面も考慮した政策
6班	「名所までのメインストリートを作ろう！！」をテーマに、必要な施策をパッケージ化した政策
7班	「空き家」に注目し、リノベーションによる活用を盛り込んだ政策
8班	「若者を中心としたまちづくり」を目指し、様々な現状を踏まえた政策

る課題解決といった協働によるソフト面からの提案やInstagramを活用した市の魅力のPR等、各班から幅広いアイデアが提案されました。

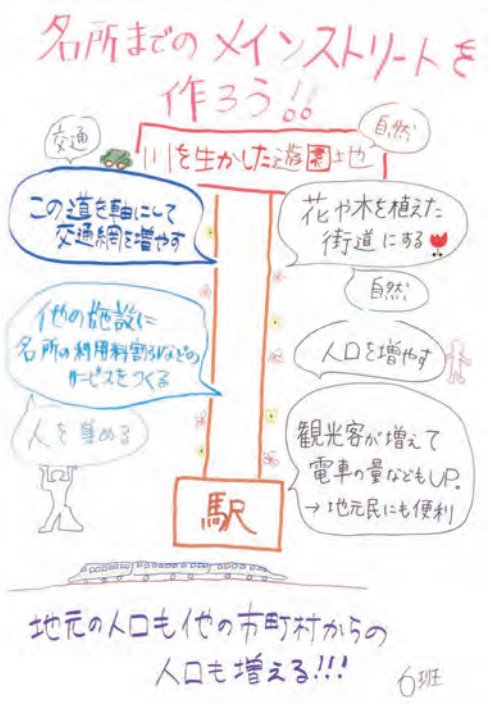
最終的に、それらのアイデアを市長の政策として模造紙にまとめ、発表、投票までを行いました。

今回の未来カフェでは、将来を担う世代である高校生の意見を聞くことを目的にワークショップを行いましたが、高校生である自分自身の立場から考えるアイデアだけではなく、高齢者や子どもの立場からの意見や正にこれから豊前市として取り組もうとしている課題に対するアイデア等、幅広い視点から客観的な意見が多く提案されていました。また、ほぼ全員がワークショップ初体験ながら、議論から模造紙のまとめまで、迷いなく進んでいたことにも驚かされました。

一方で、終了後のアンケートでも、「今まで考えられなかった事柄を考える機会になった」といった感想があり、今回の未来カフェが普段は中々意識しづらい「行政」の分野を考える良い機会となったのではないかと思っています。

せっかくこうして、しっかりと提案いただいた政策なので、後期基本計画の中に、反映できる部分は反映させる、そのお手伝いを我々としてもしっかりやっていかないといけないな、と思った「ぶぜん未来カフェ」でした。

（さくらい　けいすけ）



投票で1番に選ばれた6班のまとめ。駅（宇島駅）から河川に続く道路を軸に、それぞれの施策を紐づけた提案がなされている。

震災から13年
新潟県長岡市山古志地域を巡る

山﨑　裕行

昨年度より（株）地域計画建築研究所（略称：アルパック）大阪事務所、（株）アーバンプランニング研究所と共同で、南阿蘇村における住まいの再建・集落の復興に向けた計画づくりのお手伝いをしています。

今回、南阿蘇村の住民の皆さんが新潟県中越大震災（以下、中越地震）で大きな被害を受けた山古志地域を視察されるとのことで同行し、震災から13年を経た山古志地域を訪ねました。

●山古志地域の位置等

発災時は山古志村でしたが、平成17年4月の新潟県長岡市と合併により山古志地域となり、現在に至っています。

山古志地域は、新潟県長岡市の南東部に位置し、面積は 39.8 ㎢、平成 29 年 8 月 1 日現在の人口は 1,048 人、世帯数は 440 世帯です。14 の集落があります。長岡市の中心部からは約 20km、車で約 30 分の距離です。

山々に囲まれ、平地は少ないのですが、山間の斜面には棚田や棚池が広がり、美しい景観を形成しています。冬には今でも 3 ～ 4m の積雪があるそうです。

「牛の角突き」や「錦鯉」が有名で、棚池では、錦鯉が養殖されています。ちなみに錦鯉は、現在 8 割が海外に輸出されているそうです。

●被害の状況

中越地震は、平成 16 年 10 月 23 日 17 時 56 分に発生し、マグニチュード 6.8、最大震度 7、山古志地域では震度 6 強を観測しました。山古志地域の被害の状況については、下表の通りです。人的被害や住宅被害に加えて、山古志の代表産業である「錦鯉」も、約 20 万匹が死亡するなど、被害は甚大なものでした。

また、地域内の至るところで土砂崩壊が起こり、道路が寸断されるとともに、通信インフラも使用できなくなり、集落が孤立しました。

そこで、発生から 2 日後の 25 日には、自衛隊ヘリコプターによる長岡市への全村民避難となります。長岡市内の体育館等に避難し、避難生活が始まります。

山古志支所の方から当時の様子をうかがった際に、1 つ注目したのが全村避難から 9 日後の 11 月 3 日に避難所の村民を集落毎に再編されたことです。避難は集落関係なくされたのですが、これまでのコミュニティを大切にするという考えのもと早い時期に再編をされています。お話の中でも、このことが帰村に際してプラスに働いたのではないかとのことでした。

ただでさえ不慣れな場所、不慣れな状況での

表　主な被害状況

人的被害	死者数 5 人、負傷者数 25 人
住宅被害	全壊 297 棟、大規模半壊 69 棟 半壊 204 棟、一部損壊 673 棟
斜面崩壊等	地滑り 329 箇所、約 300 ha 河道閉塞による水没面積、約 34 ha
産業被害	錦鯉　死亡約 20 万匹
	畜産　死亡牛 114 頭

錦鯉（やまこし復興交流館「おらたる」玄関）

生活は、ストレスも多く、大変であったと思います。そのような中、近くに顔見知りの方がいることは、日々の生活の安心感や再び現地で生活したいという思いにつながったと思います。

●避難所生活から仮設住宅閉鎖まで約 3 年

「新潟中越地震山古志の被害状況と歩み」より、避難所生活から仮設住宅閉鎖までの道のりを簡単に見てみると、下表の通りです。

仮設住宅への入居から、仮設住宅が閉鎖されるまで約 3 年の月日を要しています。一度、崩れてしまったライフラインの復旧、そして、住まい・集落の再生には、多くの時間を要することを改めて認識させられました。

●人口は半減するも新たな動きが生まれる

震災時前、平成 16 年 10 月 23 日時点で山古志地域の人口は 2,167 人、世帯数は 690 世帯でした。現在は、その約半数です。また、高齢化率は 50%を超えています。

しかし、震災前にはなかった新たな活動が生まれています。例えば、今回の視察のお昼ご飯

表　避難所生活から仮設住宅閉鎖までの道のり

年月日	出来事
平成 16 年 10 月 25 日	長岡市へ全村民避難
平成 16 年 12 月 10 日	仮設住宅への入居開始 （12 月 22 日入居完了）
平成 17 年 4 月 1 日	長岡市と合併
平成 17 年 8 月	一部集落で簡易水道通水、電話開通（平成 19 年 11 月までに順次、通水、送電、電話が再開される。）
平成 18 年 9 月 1 日	山古志支所開所 国道 291 号開通
平成 18 年 10 月 30 日	山古志小・中学校再開
平成 19 年 12 月 23 日	やまこし帰村式
平成 19 年 12 月 31 日	陽光台仮設住宅閉鎖

山古志弁当（お食事処　多奈田）

農産品直売所の１つ郷見庵（ここで購入した「かぐらなんばん味噌」が絶品でした）

として頂いた「山古志弁当」もその１つです。お米や山菜、かぐらなんばん（とうがらしの一種）など、山古志の地の物にこだわって作られています。震災後に山古志のおばちゃんたちが協力し、開発されたそうです。また、農家レストランをはじめ、お食事処が５軒、アメリカの支援者から寄贈されたアルパカを活用したアルパカ牧場、その他、農産品直売所や古民家や廃校を活用した体験宿泊サービスなども生まれています。

それからもう１つ、「住民自らで地域の足の確保」ということで、廃止路線バスを引き継いだ「クローバーバス」も注目すべき取り組みです。地域のほぼ全世帯が会員（年会費5,000円）となりNPO法人中越フロンティアが運行主体となっています。このNPOは、有志で復興のあり方を提言した「山古志復興新ビジョン研究会」の委員と、中越地域の被災住民の元気づくりをボランティア活動などで支援する「中越復興市民会議」の構成員によって平成18年に設立された組織で、地域直営のバスと言えます。なお、このNPOは、やまこし復興交流館「おらたる（おらたるは、山古志地域の方言で「わたしたちの場所」という意味）」の管理運営も受託しており、「おらたる」では中越地震で体験したことや、復興に向けて積み重ねた経験を伝えるとともに、山古志の魅力を発信しています。

どうして、このような新しい動きが生まれたのでしょうか。お話を伺うと、これらは、仮設住宅での生活の間、集会所等で住民同士がこれからどのような集落にしていくか話し合い、その中から生まれたアイデアとのことです。月１回ペースで、２年間で100回以上の話し合いを積み重ねたそうです。アイデアのほとんどが形になっているのが、今の山古志地域です。

一方、若い世代の多くは、長岡市内や小千谷市、魚沼市など都市部に生活の拠点を移しました。けれども、集落とのつながりが無くなったわけではなく通っているそうです。また、大学生ボランティアや地域復興支援員（被災地域で住民に寄り添い、地域の魅力を引き出し活動を後押しする外部人材）など支援者の協力を得ることで、集落を維持しているとのことでした。

山古志の暮らしは、地域内に暮らす人だけでなく、地域に通う人、地域を支える人とで成り立っていると言えます。

●終わりに

山古志の各集落を案内して頂いた方がおっしゃった「山古志は復興したという人もいるが、私は、まだ続いていると思っている。復興には終わりがない」という言葉が、ズシッと胸に響いています。

道路が復旧する、家が建つ、人々が戻ってくるなど、形となり目に見えることだけでなく、脈々と受け継がれてきた地域での生活、それは空気のようなものなのかもしれません。「復興」に託す思い、その姿は、人それぞれです。すべてを満足させることは難しいと思いますが、少しでも実現できるプランナーになりたいと思います。　　（やまさき　ひろゆき）

第 126 回地域ゼミ報告

「不動産業から家主へ」買取り運用による博多町家再生の取り組み

本田　正明

博多に新しくできたゲストハウス「B & C Gakubuchi」の改修工事を手伝いに行った時のことでした。私の隣で、壁塗りを手伝いながら、成年後見人制度や相続のことを携帯電話で話をしている人がいました。どんな人だろうと気になっていると、ゲストハウスの人からお部屋を紹介してくれた不動産屋さんだと紹介されました。それが小林大毅さんでした。

不動産業者が借主の DIY を手伝うのは珍しいと思い、話を聞いてみると、古民家物件を自ら買取って、リノベーション（小林さんは再生と表現しています）して貸し出しているとのこと。片付けなども自分たちで行っているそうで、壁塗りの手伝いをしているのも納得です。「B & C Gakubuchi」の建物は、別にオーナーがいるそうですが、自ら物件を買取って運用する取り組みは、非常に興味深かったので、地域ゼミを企画し、話をお聞きしました。

●祖母に断られてからの不動産業の創業

小林さんは、以前東京で土木関連のソフトウェア開発会社に勤められていたそうです。相当稼ぎはよかったそうですが、寝る間もないくらい働いて、疲れてリタイアされたそうです。

「地元が博多区の神屋町なんです。祖母が家業で不動産業をしているので、家業を継ごうかなと福岡に戻ってきました。しかし、会社を辞めて戻ってくると、祖母からは今更若い人と仕事できないし、払う給料もないと断られまして…」と、アテが外れてしまったそうです。別の不動産会社に勤めてみたそうですが、「不動産業を実際やったことがなかったので、外で勉強しようと思ったのですが、3 日間仕事してみて、これであれば自分でやれるかなと思いまして…」と、すぐに辞めてしまったそうです。結局自ら不動産会社である「㈱福岡宅建」を創業されます。

「ゼロからの創業であったため、仕事がなくて、生活が不安定で、その打開策として、不動産取引の当事者である家主になりたかったですね。ただなかなか銀行からお金を借りることができなくて。そんな中、当時テレビで『劇的ビフォーアフター』や『ドリームハウス』などが流行っていました。わけあり物件の改修工事、建物の再生、奇抜なアイデアの建築等、テレビではこういったものが多く放映されていました。私もそれらを見ながら、自分でもできそうだな。やってみたいなとその熱意を温めていました」といわれるように、古い建物を建替えずに再生する取り組みがメディアを通じて認知されつつある状況でした。

小林さんと私が出会った B & C Gakubuchi

そんなとき、知り合いから「私の物件を買わないか」と声をかけてもらいます。物件も見ずに即答で購入を決めたそうです。「購入した後に初めて物件を見ました。中に入ると、スナックとして使われていたらしく、昼でも真っ暗でした。2 階の床は傾いているし、天井からゴキブリが降ってくるんですよ」と、私たちからすると廃屋同然のような物件を、確かめずによく購入したと思うのですが、「自分の初めての物件ですから、嬉しくてですね。近所に挨拶廻りにいったんですが、トタンの音がうるさい、倒れそうで怖い、猫屋敷をどうにかしてほしいとクレームの雨あられでした」と笑いながら話していましたが、周りの人からも相当な危険家屋と見られていたようです。それだけに物件はそれ相応だったようですが購入後の改修資金がありません。運転資金を切り詰めて、改修費を工面したそうです。この物件の購入と改修を期

福岡宅建が入る再生古民家。
隣はフレンチのレストラン

に、古民家の再生を手がけられるようになります。

●壊しながら使い方を考える

これまで建築に関わってことがないのに、どうやって改修を進めたのでしょうか。「テレビでは、最初にバールで壁やら天井を壊すんです。気持ちよさそうだと思って、自分でやりました。そうすると、建物の構造などがよくわかります。どうやって作られているとか、すごく勉強にもなります。また、壊している中、どのように建物を再生したら面白くなるだろうかと色々とイメージが湧いてきます」

小林さんは、基本的に設計士は入れずに、水道や電気などの工事を職人に個別発注しながら、改修します。工務店の役割を自ら担っています。「見積もりは取りましたが、その根拠がわかりませんでした。安いのか、高いのかも。また、工事によってはその工事自体が必要なのかも判断できませんでした。梁や天井裏、基礎が見えないのにどうして見積もれるのだろうと思って、お金も潤沢に有りませんでしたし、自分でやるようになりました」できるだけDIYで行うことで、工事費が下がる効果もあるようです。小林さんの手がけた物件は、基本的に柱を見せる真壁と天井をむき出しにして小屋組みを見せるようにしているそうです。木の温かみや天井高さの開放感が生まれる一方で、空調などの効きが悪くなり、光熱費がかさみますが、建物の維持管理にはとてもいいようです。

「最初に購入した物件がたまたま木造だったのですが、今考えると木造でよかったと思います。木造は部分的な柱の入れ替えなども鉄筋コンクリートと比べて容易ですし、階段の取替や間取りの変更なども比較的容易にできると思います」「私の場合、改修後はほとんどテナント向けに貸出しています。多くの人に触れてもらえるし、趣のある古民家でお店を作れると借手にも喜ばれるということが大きいですね」

博多の町家も多分に漏れず、間口が狭く、うなぎの寝床のようなところがほとんどです。建替えれば、街の趣きが失われるだけでなく、建築面積も狭くなってしまいます。防火地域であれば、雰囲気のある木造建物を商売用に建築する事は難しいです。また、御供所という場所は、天神や博多駅からもアクセスがよく、飲食店などの立地も見られる地域でした。土地柄としてもリノベーションとの相性が良かったようです。

「最初に購入した金屋小路の町家は、家賃収入から経費を引いた表面利回りが15%強です。この中には建物の購入費と改修費の返済も含まれます。今､中古物件の利回りは6～7%、新築は5%を切る場合もありますから、かなりの高利回りです。改修費も7年ぐらいでペイできます」といわれるように、ビジネスとしてもメリットの高い取り組みとなっています。

● 古民家に多いシロアリのトラブル

ただ、家主業はいいことばかりではありません。不動産は経年劣化していくので、維持、保全が必要です。そのための時間やお金もかかります。突然シロアリが出てきたり、水道管が破裂したりするトラブルもあります。

「古民家の場合、どんなトラブルがいつ起きるか想定できません。そのため、全ての契約を定期借家契約にしています。契約期間中に建物の不具合が出れば、営業をストップしないといけなくなります。そうするとオーナーは営業保証をしなくてはならないケースもあります。オーナーが途中にメンテナンスを行えるようにするためにも、定期借家契約が必要なんです」

「それでも、契約の更新前に、シロアリでトラブルになるケースがありました」といわれる

話をしていただいた小林さん。古民家再生で御供所の雰囲気が変わりつつある

ように木造古民家のシロアリはどうしても切り離せない問題です。テナントとして貸し出す場合のリスクの大きさは住宅以上だと感じました。

●「とにかくやってみる」の見本みたいな人

不動産業を始めてから現在で 12 年目。これまで 6 棟を買い取り、運用を行っています。また、古民家を所有するオーナーからの相談も増え、仲介や管理物件も増えています。

小林さんは、基本的に銀行からの融資で不動産を購入しています。件数も増えているので、それなりに借入金も増えているようです。また、これからも積極的に件数を増やしていきたいそうです。よくそれだけのリスクを負えるなと思いますが、その背景には堅実なビジネスモデルがありました。

「私が手掛ける古民家のような物件を運用する場合は、改修工事を先に行わず、借り手（利用者）を先に見つけています。だいたいの家賃条件などを設定して早々に募集をかけます。条件には家主がこんな建物として利用してもらいたい。こんな使い方（業種）をしてもらいたい。古民家の雰囲気は残してもらいたいなどのイメージを伝え、家主はここまで改修に手を加えますと説明をします」初めてのお客さんの中には、改修後の建物のイメージができず、契約できない人もいるそうですが、このプロセスを通じて家主の意向に沿った借り主を選定できるそうです。

「マッチングを先行して、まずお客さんを探します。お客がつけば、改修工事の費用負担割合を決めます。家主がどこまで改修工事をするか、引き渡しの状態によって家賃をいくらにするか、契約内容をどうするかを先に決めてしまいます」「お客が決まれば、おおよその事業計画もつくれます。家賃収入が見込めれば、改修工事費用に銀行もお金を貸してくれます。この時点で事業計画をある程度つくってしまっています。先にお金を突っ込んだり、物件を塩漬けしたりすることなく、運用ができていると思っています」既存の概念に囚われない新しい不動産事業の一つのモデルだと思いました。

「ボクは、お店に来た人がお客だとは思っていません。実際にその日は物件を紹介せずに一度帰ってもらいます。そのかわり、要望を聞いて調べて、後日調整した日に 10 件ぐらいをまとめてみせたりします」と付き合い方も独特です。このようなやり方が、合う人と合わない人に分かれるそうですが、徹底的に付き合うスタンスも魅力だと思いました。来年には糸島に移住し、郊外での建物の再生・再利用にもチャレンジしたいとのこと。農業にも興味があるそうです。私と同世代で子育て中ですが、独立しながら攻めの姿勢を貫き続ける小林さんを見ていると、やらないことの言い訳はまったくできないと思います。とにかくやってみる、やりながら考えるという見本のような人でした。

（ほんだ　まさあき）

第 127 回地域ゼミ報告

地震で被災したマンションの維持管理のススメ方とは？

本田　正明

藤野雅子さんは、マンション管理士として活動されています。法律やマンション内の住民コミュニケーションなどに明るく、普段は福岡市内のマンション管理の顧問などをされていますが、現在、熊本地震で被災したマンションの管理にも携われています。被災マンションの維持管理がどのように進められているのか、その取組状況について伺いました。マンションの防災組織のあり方などについてもお話いただきまし

表　被災建築物の診断の種類と判定内容（出所：藤野雅子さん資料をもとに一部加筆）

名称	応急危険度判定		罹災証明		被災度区分判定		地震保険	
目的	地震直後の二次災害の防止		地震後の建物への公的支援の判断基準		地震後、建築物の復旧対策検討の基準		保険対象の有無、損害額の鑑定	
費用負担	無料		無料		有料		有料	
診断者	応急危険度判定士		市町村職員		建築構造技術者等		鑑定人	
判定内容とその意味	調査済み	建物は使用可能	一部損壊	損害20%未満（修理すれば住むことが可能）	軽微	柱・耐力壁・二次壁の損傷が軽微か若しくは、ほとんど損傷がないもの	一部損	建物が床上浸水若しくは地盤面より45cmを超える浸水を受け損害生じた場合で、全損・半損に至らないとき
	要注意	立ち入りには十分注意	半壊	損害20%以上40%未満（修理すれば住むことが可能）	小破	柱・耐力壁の損傷は軽微であるが、RC二次壁・階段室の周りに、せん断ひび割れが見られるもの	半損	焼失若しくは流失した部分の床面積が、全体の20%以上70%未満
	危険	その建築物に立ち入ることは危険	大規模半壊	損害40%以上50%未満（修理すれば住むことが可能）	中破	柱に典型的なせん断ひび割れ、曲げひび割れ、耐力壁にせん断ひび割れが見られ、RC2次壁・非構造体に大きな損傷が見られるもの	全損	焼失若しくは流失した部分の床面積が、全体の70%以上
			全壊	損害が50%以上（修理しても住めない）	大破	柱のせん断ひび割れ、曲げひび割れによって鉄筋が露出・座屈し、耐力壁に大きなせん断ひび割れが生じて体力に著しい低下が認められるもの		
					倒壊	柱・耐力壁が大破損し、建物全体又は建物の一尾が崩壊に至ったもの		

たが、今回はマンション躯体（建物）の話に絞って紹介します。

●被災マンションの早期の取り組みの必要性

地震の被害を受けたとき、被災者が何を思うかというと、「このマンション住めるのか」、「赤紙ってどういう意味？」、「お金はどうすればいいの？」ということに尽きる。これに悩んでいるだけで2か月ぐらいがすぐ過ぎてしまう。

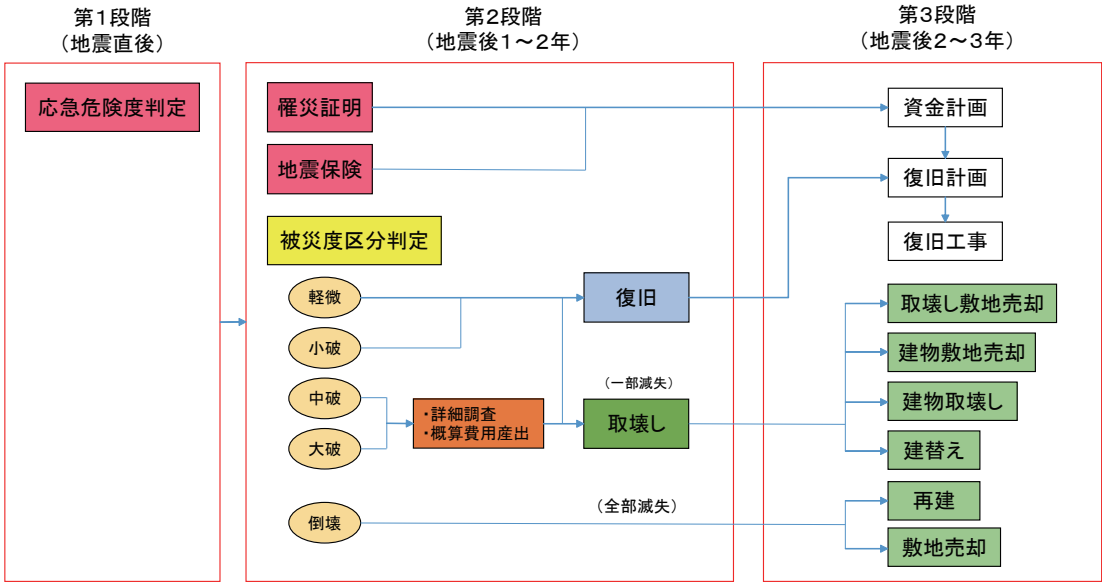
熊本地震で被災したマンションの数は明らかではないが、罹災（りさい）証明で全壊と認定されたマンション棟数は18棟となっている。柱が損壊し、一階が失われたようなマンションであれば、あきらめもつき、解体に向けた協議が進むのだが、問題は直せるレベルの被害の場合である。鉄筋がむき出しになるぐらいの被害は、新耐震のマンションでも起こりうる。実際にそういう被害のマンションが熊本でも多いのが現状である。私が関わっているマンションでも同様の被害を受けて、現在復旧工事の見積もりを取っている段階である。築20数年の50戸前後で一億数千万の見積もりが出そうである。ただ、地震後1年半ほど居住しておらず、給水管や排水管を使用していなかったため、ライフラインの復旧費用や耐震診断も必要であり、さらに費用が高額になる可能性がある。

被災マンションの対応は、行政も後手に回っており、地震後の混乱で罹災証明の連絡などの初動がどうしても遅れてしまう。初動が遅れ、検討期間が長くなれば、工事業者も確保が難しくなり、工事費も高額となってしまう。住民の生活再建のためにも早期の復旧はかかせないのだが、そのためには被災した場合の対応について、事前に知識を持っておくことが重要になる。

●被災マンションの診断は４種類

地震を受けた時の建物の評価を行う診断は実は少ない。「応急危険度判定」、「罹災証明」、「被災度区分判定」、それと「地震保険」の4つである。応急危険度判定は二次災害の予防のため、地震後すぐに行われる。赤紙（危険）、黄紙（要注意）、緑紙（調査済）の判定が行われ、これは拒否できない。罹災証明はお願いしないと来てくれないが、無料で判定してくれる。全壊、大規模半壊、半壊、一部損壊の4区分あり、行政からの支援をもらうために必要なものである。被災度区分判定は、建物を復旧できるかどうかを見るものである。これは有償になる。合意形成がスムーズに行くマンションでは、この判定を経ず、復旧工事に舵を切る事もある。地震保険はマンション総合保険にオプションで加入する保険だが、地震保険の認定を請求すると

表　被災マンションの復旧・取壊しの手順（出所：藤野雅子さん資料をもとに一部加筆）



保険金算定のために鑑定人が派遣され、そのマンションの損傷具合を診断する。全損としての場合でも付保割合（保険金の掛け率）を低くしてしまうと、もらえる保険金がかなり少なくなる。そうしたところも注意しておく必要がある。地震の判定は、この４つしかないので、それぞれの判定の役割をきちんと理解しておく必要がある。

●復旧や建替えに向けた手順

被災度区分判定で、「軽微」、「小破」と診断された場合は、すぐに復旧に向けて動き出すのだが、問題は「中破」、「大破」と診断された場合である。この場合、復旧は可能なのだが、費用がどれくらいかかるかが問題となる。詳細調査と概算費用の算出が必要になるが、これにもお金がかかる。法的には必要な調査ではないが、合意形成のために必要なものである。

手順としては、まず被災度区分判定を行うかについての総会が必要であり、議決後、調査を行い、結果の報告会と兼ねて詳細調査を実施するかについての総会が必要となる（調査費が数百万円と高額なため）。その後は、「復旧」するか「取壊し」するかをいきなり決めるのではなく、復旧推進決議もしくは取り壊し推進決議（管理組合として、決議に向けて本格的な計画の検討を行う旨の決議）を行う。

区分所有法は敷地売却を想定していないのだが、被災マンション法の適用を受ければ行えるようになった。熊本の場合は、昨年 10 月 5 日に被災マンション法が適用されたので、「取り壊し敷地売却」「建物敷地売却」「建物取壊し」「建替え」の決議が行えるようになる。被災度区分判定で「倒壊」という判定が出れば、「敷地売却」か「再建」を選ぶことになる（全壊の場合は建替えを再建という）。上記の手続きは敷地共有者の５分の４の同意が必要となる。管理組合の理事会は存在しないことになっているため、敷地共有者で新たな団体（以下、敷地共有者団体）をつくって行うことになる。

公費で解体を行うためには、申込みのタイムリミットがあり、全員の同意書が必要となる。「建替え」と「敷地売却」の場合は、敷地共有者団体で建替えを行う事業者や売却先までを決め、詳細な計画まで決議を取らないといけない。時間的余裕がないため、とりあえず、取り壊しの決議を行い、申込みを行った上で、再度建替えか敷地売却かを決めて総会を行うことが多いようだ。被災マンション法の適用から３年以内に決める必要があり、期間を過ぎると被災マンション法の適用がなくなり、手続きが非常に困難になってしまう。熊本では、後２年以内に決めてしまわないといけない。反対者も含めて全員の同意書を集めるのはハードルが高いため、全員分必要かどうかについては、行政との

協議を行っている。このあたりの手続きは法律的にもかなり難しい。阪神淡路大震災でも裁判になっているのはこのあたりである。法律違反がないように慎重に進めないといけない。

●住宅への支援制度について

住宅に関する支援もいろいろある。災害見舞い金は全壊で5万円、大規模半壊・半壊で3万円ほどでる。このときに罹災証明が基準となる。日本財団による住宅損壊見舞金が全壊・大規模半壊の世帯に20万円でている。災害義援金は熊本の場合、全壊で82万円。大規模半壊で41万円だった（平成29年4月現在）。なお、東日本大震災の場合は全壊で112万円だった（平成29年8月現在）。また、一部損壊の住宅で、修理費用100万円以上かかったところには10万円の義援金がでる。マンションの場合、共用部の改修の自己負担額の合計が100万円を超える場合は対象となる。

被災者生活再建支援金は、全壊で100万円、大規模半壊で50万円でている。新築する場合、全壊だとさらに200万円、補修の場合は100万円がでている（大規模半壊は新築で100万円、補修で50万円）。

被災住宅の応急修理というのがあり、修理費用が57万円でる。ただし、居住するための費用なので、みなし仮設などに入居するともらえない。トイレ、玄関ドア、お風呂などの工事で出るのだが、マンションの場合は、共用部の配管修理などが必要な場合もあるため、管理組合が代表して申請することが可能である。

住宅の支援は、居住のための支援であり、経済的な損失の支援ではないため、同じマンションでも賃貸部分はもらえない。被災住宅の応急修理にしても、管理組合で代表して申請しても賃貸部分の人やマンションを出て別の住居を確保した人の部分は、もらえないことになる。あるマンションでは、被災住宅の応急修理の費用の半分は共用部の修理に使い、残り半分は個人のトイレ修理などに使うということを行っている。しかし、こうした情報の周知や合意形成はかなり高度であり、日頃からのコミュニケーションや防災意識を持っていないとなかなか難しい。支援については行政側もまだまだ手探りで行っている状況である。

●事前の情報収集と情報共有から

以上が藤野さんのお話です。被災マンションの対応は、一度聞いただけでは全部は理解しきれない内容でした。私自身もこの記事を書くために、なんども聞き直しして、ようやく理解できた部分も多くあります。ゼミの参加者からは「応急修理の費用を一部の住民がもらった場合、公費解体できるのだろうか？」という質問も出ましたが、藤野さんも確認しないとわからないこともまだまだあるようです。

こうした内容を被災時の混乱の最中に理解し、マンション住民の方々と共有した上で、限られた時間内で決断していくことは困難を極めると思いました。実際に合意形成を急ぐあまりに、内容が不十分な計画を作ってしまい、結局やり直しになったケースもあるそうです。

マンションは戸数が多く、避難場所にいくと満杯になってしまうため、自分たちで生活再建も行っていかないといけません。マンションという財産を共有しており、集落や戸建ての住宅地よりも高度な自治機能が要求されます。しかし、実態は隣人の顔も知らないぐらい人間関係は希薄であり、管理組合も管理会社に依存しているような状況です。被災後の右も左もわからないような状況の中、余計な不信感を生まないためにも、事前の情報共有や準備が必要だと感じました。

それ以上に、普段から住民とのコミュニケーションを図り、人間関係や信頼関係を築いておかないと、いざというときに動けません。地域の祭りや直会など、住民の人たちで何か一緒にイベントや活動をすることの重要性も感じました。早く動けるかどうかは、地震前の準備で決まっています。まず、自分がやれることとして、自分のマンションでも藤野さんを呼んだ勉強会を提案してみようかと思います。

（ほんだ　まさあき）

皆様から寄せられた「よかネット」へのご意見、近況などの紹介（敬称略）

■現在、粕屋町の「バラ」を職務としていますので、何かあれば連絡してください。
（福岡県粕屋町　野中　清人）

■機関誌楽しみにしています。他市の情報が詳しく書いてあり、参考になります。
（伊万里市　松永　亨）

■今年1月には住田町の多田欣一町長との共著という形で「住田町の後方支援」という本を出版させていただきました。東日本大震災の時、住田町が取り組んだ後方支援の物語です。
（大船渡市　木下　繁喜）

■神戸市の自治会連絡協議会（自治会の統括機能）のアドバイス役として参考意見を述べる時の有効な資料として活用させてもらっています。（特に地域活性化について）
（神戸市　吉田　昭彦）

■2017.2.22座談会「モノレール・鉄道整備とまちづくり」の司会をやりました。その成果は、都市地域の求める「Amenity＋Compact＋Network」に役立つと思います。これからは国際会議をやり、都市の強靭化にも役立つ「Lotus Network」向上を期したい。
（小金井市　渡部　與四郎）

■いつも「よかネット」を楽しみにしています。私も65才を超えてしまったので、日常的な勤務は難しいですが、週1～2回の勤務ならやれそうです。家庭菜園も20年近くなります。でもなかなか「これ！」というようなものが採れないのが現実です。今後とも「よかネット」の内容が充実していくことを願っています。
（北九州市　丸山野　美次）

■豪雨土砂水害のニュースを聴聞するたびに、森を林を、樹々を愛の眼差しで、愛の手をさしのべることの大切さを希求するものです。世界子ども愛樹祭コンクールも創始27年目を迎えます。
（八女市　椎窓　猛）

■水害で大変でした。床上1mでした。
（日田市　宿利　博幸）

■内容の濃い情報提供に感心するとともに感謝です。「志」を持った人達が少しずつでも何かをやることが社会の発展に寄与するものと思っています。
（熊本市　髙木　正三）

■新居に住み始めて1年経ちました。基本的にとても住みやすく、気持ちのいい空間になっています。アベノミクスがなければ、太陽光発電、井戸水利用、内装材のグレードアップが可能で、もっと良かったと思いますが。
（福岡市　江上　徹）

■介護保険の地域（市町村事業）への移行が進んでいます。お礼に福岡に行った時にこの分野「介護保険と町づくり」などお話しさせていただきます。
（東京都渋谷区　服部　万里子）

■昨年社長を退任、今年は取締役もやめて、顧問となりました。SAGA HIMATも2,000名以上の実績を重ね、ガン治療に力を発揮しています。あと1年は勤めます。
（東京都世田谷区　山野　宏）

■街づくりは卒業しましたが、資料を参考にし、街おこしのお話をさせて頂いています。
（日田市　石丸　邦夫）

■市街地の中に農地を残し、皆で活用する仕組について、提言準備中です。
（坂戸市　水口　俊典）

■九州北部を襲った今回の大規模集中豪雨、一瞬にして地域が崩壊しましたが、地域再構築へむけたエネルギーを巻き起こすようリードしてください。
（国東市　福田　昂明）

■九州中央部の豪雨、3月に降り立った「夜明」駅、そしてその周辺のスケッチをひもとき‥‥です。日本の地方の地域が崩れ去らないことを祈ります。（神戸市　上谷　重男）

■とても興味深く拝見しております。とくに「里山十帖」は私も大変関心を持っており、ぜひ一度訪れたいと思っています。
（熊本市　井上　恵）

■公共施設のバリアフリー化が最近進んでいます。昔のことを考えると、隔世の感があります。が、玉石混淆の状況ですね。
（別府市　小田　博道）

■熊本地震の被害調査において、熊本県の伝統的建造物のデータが充実していることに刺激を受け、NPOとして唐津市内の伝統的建造物のデータベース化に向けて調査を始めました。（唐津市　菊池　郁夫）

■私が20年以上前から言っていた公園の多目的な活用や緑花活動への市民サポート制度などがやっと盛んになってきました。舞鶴公園のBBQ常設化やマルシェ開設などに向けて準備を進めています。プライベートではNPO法人OnPalを設立し、九大病院、こども病院、福大病院に入院しているこどもの為にプロの音楽家による音楽授業やコンサートを行っています。公私とも超多忙な毎日です。（福岡市　真隅　潔）

■階段の上位ではなく、心身も障害者に近く、自らをLoserのように感じることもあるが、前期高齢者になっても、普通に生存しているようにも見える。気侭に常勤監査役をしており、人生の条件として悪くない。むしろ恵まれているのではないか。それなのに、その条件を殆ど活かしていない。これに似ているのが、25年以上元気のない日本社会。金融政策で、もっと喝を入れるしかないのでは。もっと早く、もっと強力に、形振り構わず。（東京都豊島区　佐藤　正憲）

■奄美大島で毎号楽しく読んでいます。「バニラエア就航後の経済効果」調査でお世話になってからのお付き合いですが、他の地域の情報がネットよりも誌面から熱く伝わってきます。（鹿児島県瀬戸内町　藤井　愛一郎）

■毎日農林業に汗を流して頑張って居ます。よかネットの皆様も元気で働いて下さる様に!!（唐津市　諸熊　雅博）

■ちびたびツアーを催行しているオフィスパルの吉川です。サテライトオフィスがTABIcafe内にできましたので、遊びにいらして下さい。（糸島市　吉川　直子）

■いつも楽しく拝読しています。諸行無常の時の流れに、よかネットさんもイノベーションに努力されていると存じます。（大分県玖珠町　内村　雄二）

■朝倉市、東峰村、添田町、日田市の豪雨災害に心が痛みます。数年前、観察会で訪問しました川茸の黄金川もきっと洪水で採集できなくなったのではないかと心配です。（福岡市　長野　覺）

■いつも興味深く読んでいます。貴誌にとり上げられる業務分野も、以前とは違って、公共施設の適正管理・統廃合や、ソフトな地域活性化の実験などが多くなるなど、時代の変化を実感します。これからも生きた情報を期待します。（東京都北区　大竹　亮）

■全国の活動状況とても参考になります。先進的実例とても勉強になります。「島への移住」とても参考になりました。空き家の取り組みも、引き続き関心があります。竹の駅もいいですね。（鹿児島県屋久島町　浦田　功）

旧旅館をコンバージョン
～「唐津市子育て支援センター」がオープンして5ヶ月が経ちました～

山田　龍雄

唐津城の近くに、昭和21年に創業した鉄骨4階建ての老舗旅館「城内閣」がありましたが、経営悪化のため平成22年1月に閉館しました。その後、平成23年11月に唐津市が購入した際、老朽化が進み、設備等の更新も必要であった「障がい者福祉会館」を当旅館の1階、2階に移転させることとなりました。平成24年～25年度にかけて基本計画、実施設計を行い、「唐津市障がい者支援センター」として平成27年4月1日にオープンしました。

3階、4階については平成26年～28年度にかけて基本計画、実施設計、建設工事が進められ、平成29年4月1日に「唐津市子育て支援センター(以下「子育て支援センター」という)」としてオープンしました。建物全体の名称は、市民から公募し、「りんく」と命名されました。

弊社は、縁あって両センターの基本計画策定のお手伝いをさせていただきました。「障がい者支援センター」は、「障がい者福祉会館のあ

図　子育て支援センターの平面イメージ（3 階）

図　子育て支援センターの平面イメージ（4 階）

り方検討委員会（平成 21 年 7 月）」及び「障害のある人への支援の基本方針（平成 23 年 2 月）」の検討結果を踏まえた上で、「障がい者福祉会館あり方委員会」に諮りながら、具体的な基本計画を固めていきました。

平成 26 年当時、3 階、4 階の利用については、子育て支援を中心とした活用という方向性は決まっていましたが、具体的な運営主体や機能は決定しておらず、3 階は子育てグループを中心としたレンタルオフィスと災害時の備蓄倉庫等、4 階は屋内型遊技場と会議室などの機能を収めた計画としていました。

子育て支援センターとなる 3 階、4 階の利用方法については平成 26 年の早い時期に、当時、大手口バスセンタービル内に事務所を構えていた「子育て支援情報センター」の機能拡張と併せての移転、4 階は「屋内型キッズルーム」にするとの方向性が決定され、その後、弊社が平成 26 年 11 月に唐津市から委託を受け、コンバーションの基本計画を策定しました。

「子育て支援情報センター」と「屋内型キッズルーム」がオープンし、早や 5 か月が経過しました。オープンしたあと、基本計画どおりに実施されたのか、部分的に変更されたのであれば、その理由は何なのかといったことが気になり、一度、見学を兼ねて NPO 法人唐津市子育て支援情報センターのセンター長である山口ひろみさんにお話を伺いました。

●内部空間の仕上げを子育て支援センタースタッフが提案

基本計画と実施設計との間取り構成は、部分的に部屋の入れ替えがありましたが、大きな変更はありませんでした。クッキングルームについては、唐津城が見える方が良いということで会議室と位置を替えたそうです。

山口さんに実施設計において、どのようなことに気を使ったかをお聞きすると「旧来の公民館みたいな固いイメージにしたくなかった。この施設は、子育て中のお母さんがゆっくり、リラックスできるような空間にしたかったのです。知り合いを通じて床材や壁材のサンプルを収集し、すべての部屋の床材と壁材をスタッフと話し合いながら決めました」とのこと。

話を聞き終わったあと各部屋を見せていただくと、3 室ある病後児の保育室の壁の色はすべて異なっており、楽しい空間を演出しています。ミーティング室の北側の壁は全面ホワイトボードとし、会議のメモやスクリーンとしても活用できるようにしています。

お母さんやお父さんが乳幼児の子供さんと一緒に寛げるフリースペースの北側壁面は、チョークで子供たちが自由に落書きできる壁材を貼っています。また、共用廊下の壁面にも、落書きコーナーや掲示板が貼れる壁面を設置し、多様な掲示や遊びにも対応できるようにしています。

クッキングルームは、お洒落な IH 式熱源のキッチンを 9 台配置しており、「離乳食教室」などの子育てをメインとした料理教室を行っています。今のところ、1 週間に 1 ～ 2 回程度の利用なので、今後、一般の人にも開放する方法や仕組みについて検討中とのことです。

●お父さんたちの利用が 5 倍以上増える

施設オープン後に利用し始め、子育て支援センターのスタッフが気づいた点としては次のようなことが挙げられました。

旧旅館をコンバーションした「りんく」
（障がい者支援センター、子育て支援センター）

この点は、事前に子育て支援センタースタッフ及び実施設計担当者も気づかなかったことのようで、今後、順次、改修等が出てくるかも知れません。

・4階の屋内型キッズルームの利用者が多い時に、子供たちの動き回る振動や音が3階まで伝わり、防音対策を考える必要があった。

・病後児ルームは、廊下にドアを設け、一般の人が安易に入ってこられないようにしてるが、夏の時期には、廊下部分が非常に暑くなるため、容量の大きな換気設備が必要であった。現在は子供の落下防止のため、使用時には窓も開放できず、扇風機で対応している。

・病後児保育室の部屋で子供の手がアルミサッシの下枠に届く個所があり、ここが夏場に非常に熱を帯びて、子供が火傷する可能性があった。そこで、一部自前で木材の板枠をはめ込んだ。

利用し始めて、いくつか改善すべきことが出てきているようですが、この新規の子育て支援センターの規模は、大手口にあった時と比べて5倍程度となっているため、すべてが非常にゆとりのある空間となっています。このゆとりある空間とスタッフの皆さんが工夫された細やかな内装等のデザインが原因なのかはわかりませんが、お父さんたちの利用が、5倍以上に増えているそうです。お父さんの中には、子供たちを自由に遊ばせながら、本人は本を読むなど

3階の事務室前のフリースペース
真正面の壁は、チョークで落書きができるとのこと

して数時間過ごしている方もいるらしいとのこと。山口さんが、「やはり、施設の空間や環境は、非常に大事ですね。実施設計に係わって実感しました」と、おしゃったのが印象的でした。

●5か月で約1万6千人の利用の屋内型キッズルーム

当初、4階に屋内型のキッズルームを設けるという企画を受けたときに、本当に利用があるのかと不安でした。そこで、基本計画策定時に「子育て支援情報センター」の利用者約140名にアンケート調査を実施しました。このアンケートの結果としては約85%と高い利用意向がみられたものの、実際にオープン後、本当に利用されるのかは気になっていました。現在、この屋内型キッズルームは、子育て支援課が運営しており、常時3名がスタッフとして関わっておられ、使用料は無料です。

施設オープン後の利用は、4月～8月までの5か月間で約1万6千人です。夏休み期間の土曜・日曜では常に200人超え、最高314人が来たそうです。スタッフの方にお聞きすると、300人近くになると子供たちがぶつかり合い、少々危ない状況とのことのようです。いずれは利用時間の制限や利用者数の制限をするなどの工夫が必要かも知れません。

8月の利用者は4,500人であり、うち82%（3,700人）が市内利用ですが、残り300人は県内の隣接市町村、500人が県外利用でした。8月は帰省の親御さんもいたかも知れませんが、1割～2割は市外からの利用のようです。

アルミサッシ下枠の夏の日差しの熱を抑えるために自前で木枠をはめ込む

4 階の屋内型キッズルーム
5 か月間で約 1 万 6 千人の利用

この施設で利用し始め、キッズルームスタッフが気づいた点としては、下記のようなことを挙げられました。今回、基本計画から実施設計、オープン後の管理者からみた使われ方での良かった点、改善すべき点を素直に聞かせていただきました。

・キッズルームに隣接して設置しているサロンルーム（親子が休めるコーナー、食事コーナー等）が、利用が多いときには狭くてゆっくり食事がとれない。これについては同じ階に設けている会議室で対応するようなことが必要でないか。

・利用者が多いときには、1 歳児のコーナーに 2 ～ 3 歳児の児童が入ってきて、1 歳児の居場所が無くなってくる。これは別に部屋または簡易間仕切りのコーナーを設けるなどの工夫が必要ではないか。

今後、このような計画を策定するにあたっては、今回の取材を参考に、よりきめ細やかな基本計画策定を行っていきたいと思った次第です。　（やまだ　たつお）

福岡市市民総合防災訓練（東区会場）に参加
～福岡県建築士会にて紙管間仕切りを設置～

山田　龍雄

去る 9 月 9 日、福岡市市民総合防災訓練（以下　総合防災訓練）が東区の青葉中学校で実施された。当日は、昼 31 度とやや残暑の厳しさが残る気候であったが、快晴であったことは、なりよりであった。

この総合防災訓練は、福岡市民の防災意識の普及啓発と災害時における防災関係機関の連絡体制の確立及び防災技術の向上を目的に、福岡市の総務課が中心となって企画し、毎年実施されている。

●17 団体が参加協力する総合訓練

総合防災訓練は、午前 9 時に警固断層帯南東部（陸側）にて震度 6 強の地震が発生したと想定し、青葉校区の住民が中学校のグラウンドに避難するとこから始まった。

総勢約 2, 000 人が参加した福岡市市民総合防災訓練
～青葉中学校グランドに集合

10 時の開会式が宣言され、東区区長の挨拶のあと、緊急アラーム音とともに、避難者全員で中腰にしゃがんで頭を押さえる対応行動訓練を行った。

紙管間仕切りブースにて、避難所の間仕切りの事例を紹介

紙管間仕切りコーナーでは、いくつかの自治会から貸し出し要請を受ける

10 時 30 分頃から、参加者は事前に準備された下記の訓練を見学または体験するため、グループごとに分かれた。

当日の訓練・展示種目

①水消火器使用訓練、② AED 使用訓練・心肺蘇生法訓練、③搬送訓練、④サバイバルクッキング、⑤自衛隊活動内容展示・ロープワーク、⑥気象実験、⑦煙道通過訓練、⑧非常持出品チェック、⑨搬送訓練・応急手当訓練、⑩簡易ベッド作成⑪簡易スリッパ作成、⑫紙管間仕切り、⑬炊き出し訓練・食料供給訓練、⑭車両等展示

私は福岡県建築士会・まちづくり委員会のメンバーとして「紙管間仕切り」の組み立て、災害時の避難所間仕切りの様子を示した展示などのお手伝いをした。

この総合防災訓練は、青葉校区自治連合協議会をはじめ、17 の関係団体が関わった大掛かりなものである。当日は総勢約 2,000 人の参加があったそうだ。

参加協力機関

・青葉校区自治連合協議会・青葉校区自主防災組織
・青葉校区食生活改善推進委員協議会・青葉中学校
・青葉小学校・青葉公民館・陸上自衛隊
・福岡管区気象台・福岡県東警察署
・日本自動車連盟福岡支部・福岡和白病院
・原土井病院・博多あん・あんリーダー会
・福岡県建築士会・東消防団・東消防署・東区役所

これだけの総合防災訓練になると、関係機関との連絡調整など、事前準備はさぞや大変であろうと思ったと同時に、福岡市の防災に対する力の入れ方を直に感じることができた。

防災訓練は、段取りが決まったイベントではあるが、多くの住民が災害時の疑似体験ができること、また、防災に関する様々な訓練コーナーで見学、体験するだけでも、本当に勉強になる。また、総合防災訓練では青葉中学校の生徒さんが制作した簡易スリッパや簡易ベットコーナーもあり、中学生の防災教育の一環にもなっている。

●自治会から紙管間仕切りの使用要望

紙管間仕切りは、建築家の坂茂氏が東北大震災のときに、避難所となった体育館等に導入されたことから知られるようになった。その後、一昨年の熊本地震、今年の九州北部豪雨の災害時でも導入されている。

紙管は、サランラップの心棒を大きくしたような円柱の段ボールであり、柱と梁を組み合わせて骨組みを造る。あとはプライバシー保護のために布をかけるという非常に簡便に間仕切りができる、優れものである。

紙管間仕切りコーナーで説明していると、いくつかの自治会から、「我が校区でも訓練で使ってみたい」という申し出を受けた。

この紙管間仕切りは、熊本地震で実際に使用されたものを少しばかり譲り受け、福岡県建築士会で所持しているが、このような自治会からの申し出は初めての経験であったことから、その運搬方法や使用料等も含めて決まったルールは設けておらず、今後、検討していく必要がある。紙管間仕切りシステムは、坂茂建築設計と NPO 法人ボランタリー・アーキテクツ・ネットワーク（VAN）が提供するシステムで、その使用について福岡県と協定を結んでいるが、使用するための運用方法等については明確に決まっ

ておらず、今後の検討課題となっている。

私は、昨年度から香陵校区自治協議会の「安心安全・住環境部会長」を引き受け、活動しており、毎年、3月末にウォークラリーと合わせて防災訓練をしている。

我が校区でも、避難所訓練で是非、紙管間仕切りを体験コーナーに組み入れたいと思った。

福岡市は　今年度、各小学校に備蓄倉庫の設置、舞鶴公園での防災キャンプ実施と防災に対して非常に力を入れている。

実際、警固断層帯南東部（陸側）については、福岡市の「揺れやすさマップ」に「いつ発生してもおかしくありません」と明記されている。

警固断層帯南東部で地震が発生した場合、陸側の直下型の地震になることから、西方沖地震のときに比べて、相当な被害が発生することが予想される。

しかし、私も含めて多くの人が「いつ起こってもおかしくない」と言われても「今日ではない、明日ではない」と思い続けており、いわば他人事と考えている。

しかし、昨今、災害が多い時代になったこと、私自身、自治協議会の役割を拝命したこともあり、我が校区では、防災意識を高めるためのセミナーの実施と自治会ごとの防災会の立ち上げを促すような仕組みをつくっていければと思っている。　（やまだ　たつお）

近　況

朝倉市の災害ボランティアに行ってきました

●土日に参加してほしい災害ボランティア

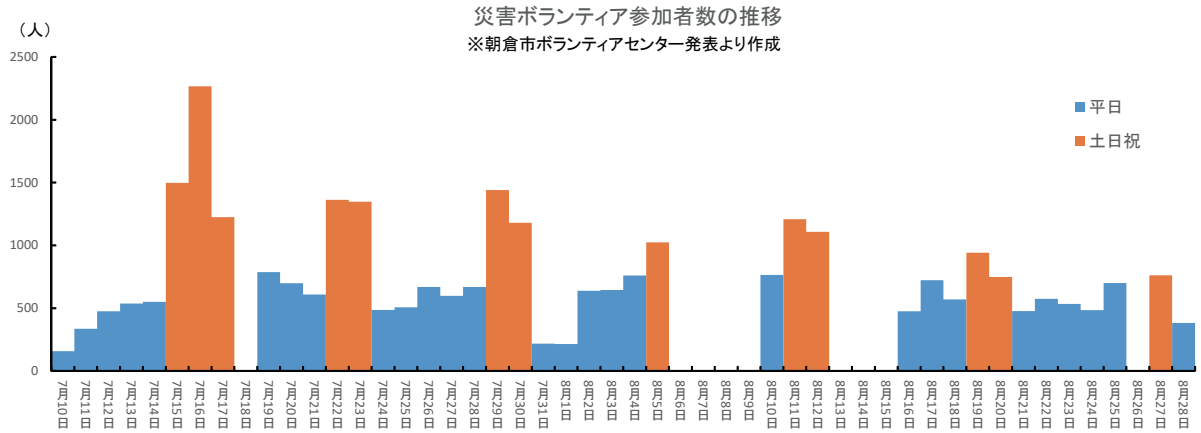
8月24日（金）に朝倉市の災害ボランティアに参加してきました。何かお手伝いをしたいと思いながら、ようやく行動に移せました。平日が人不足だろうと思ったのですが、金曜日ということもあり、700人が参加していました。現地のスタッフによると、被災者からの要請は土日希望が多く、作業もたくさんあるそうです。被災者の方々も日常の生活があり、平日は片付けまで手が回らないのかもしれません。

朝倉市ボランティアセンターは、杷木パレスという元パチンコ屋に開設しています。バスを乗り継いで参加したのですが、公共交通を使った参加者は皆無でした。10時前に到着したのですが、すでに200人以上が集まっていました。受付後、初めての参加者は注意点などのガイダンスを受けます。

長靴などが新しく、初めて参加する人が多い印象でした。大学生などのグループや50～60代の個人参加者が多く、30～40代の同世代は少ないようでした。ガイダンスの担当者は沖縄から来たボランティアでした。

よくみると運営スタッフもみんなボランティアです。交通整理、受付、ガイダンス、運転手、道具の貸出、電話対応など、実に多様な業務があります。また、場所の提供やテント、軽トラ

図　災害ボランティア参加者数の推移（災害ボランティアの人数は、平日と比べて土日の減少が目立っている）



ボランティア作業のマッチングを待つ様子。ここで1時間ぐらい待機

水害作業マニュアル。「被災された方の気持ちやペースに合わせよう／お話をたっぷり聞こう」というのは本当に大切だと痛感。

やスコップなどの資材、水やお茶などの備品提供など、様々なボランティアのカタチがあるのだなと改めて感じました。

ガイダンス後は、業務とのマッチングです。一応先着順なのですが、作業に応じて選択できます。内容に納得した上で手伝ってほしいという事務局側の配慮が伺えました。

●被災された方の気持ちに寄り添った支援のあり方を考えさせられる

この日は午前中に雨が降り、復旧が遅れている被災地に入れなくなったため、手伝えることが限られていました。そのため、私たちは片付けがほとんど終わった地区を手伝いました。それでも雨を含んだ泥のかき出しは大変です。

男性10人いたので、すぐ終わると思ったのですが、結局全部を片付けることができませんでした。現地に入ったのが11時半。14時には作業を終了したので、2時間半の作業です。正直、物足りなかったし、片付けきれずに申し訳なく思いましたが、依頼者のご夫婦から「本当はもう片付けを諦めていたんです。だからほんとに感謝しています」と言われてほっとしました。

1ヶ月近く放置された泥が少しでも片付く。少しでも前に進むことが被災された方々にはありがたいことなのだと気付かされました。

被害がまだ残っている地域に入りたい、もっと長く作業したい、最後までやりたいというのは自分の欲であって、被災者の立場に立っていませんでした。

この地区は床下浸水で済んだそうですが、この災害を機会に施設に入居したり、子どもの家に移り住んだりして空家になったところが4軒あるそうです。「盆綱引きもできませんでした」と寂しそうに話すお母さんの横顔を見ながら、片付けが落ち着いたら、終わりなのではなく、ようやくスタートラインなんだと思いました。

現地にほんのわずかな時間しか滞在していませんが、いろいろと考えさせられます。仕事柄、長い目線で考えることが多いので、どうしても片付け後のケアをどうしていくのかが気になります。ずっとはムリでも、少しでも関わること、お役に立てることがあるのではないか。今回のお手伝いを通じて、微力ながらも手伝うことの意義を可能性を感じました。少しでも時間を見つけて、また通いたいと思います。

（被災地での写真は撮影していません）

（本田　正明）

拡 100円ショップ持出品コンテストをやってみる

9月3日（日）に、福岡市舞鶴公園で開催された防災キャンプに行ってきました。プログラムの1つである「防災共創ワークショップ」に参加するためです。ワークショップは、「くう（食）・ねる（生活環境）・あそぶ（健康）」の3つの領域について、課題を見つけ、その解決につながるアイデアを創造することを目的に福岡地域戦略推進協議会（FDC）さんが開催されたものです。このワークショップでは、最後にアイデアを発表する時間があり、私は3つ提案

“もしも”に備えて提案を実践

全 9 品の持出品

をしたのですが、そのうちの 1 つを今回実践してみました。

実践してみたのは、「100 円ショップ持出品コンテスト」。100 円ショップを舞台に持出品を揃えてみるというものです。

最近の 100 円ショップは、品数が豊富です。そして、商品の回転も早い。以前に目を付けていた商品が無いということもあります。100 円ショップを巡ること小 1 時間。ようやく品物を揃えました。

今回は、いくつか条件を設けました。

①会社にいる時に被災。

②普段、使っているバックに入れているものは除く。

③とりあえず 3 日をしのぐために、最低限必要なものを揃える。

④ 1,000 円前後で揃える。

まずは、品物を入れるためのケースということで、普段、使っているリュックに入れられるものを探しました。ちょうど「B4 サイズの透明ケース」があり、それを購入。これに入るものを探すことになります。

大規模な災害が起きた時に、必ず問題となるのがトイレ問題です。生きている以上、トイレ問題は避けては通れません。そのための品物を物色。100 円ショップには、緊急用のトイレグッズもありましたが 1 回限りです。複数枚購入することも考えましたが、色々なものに使い回しが出来るものが良いということで「ゴミ袋」を購入。それから、トイレの時の目隠し、また、寒さ対策となるものを探して「アルミ製ポンチョ」を購入しました。実際に羽織ってみると、非常に暖かい。ただ、寸法が少し短く、体が大きな私が目隠しとするには工夫が必要なようです。そこで、ポンチョの開口部を綴じるだけでなく、名札やメモボード代わりにもなる「布製ガムテープ」を購入しました。ガムテープは、使い勝手の良い道具です。封緘、梱包するだけではありません。なお、ペンは、黒ペンを常日頃持ち歩いているため、購入していません。

ここまでで 4 品。残りは 5 品です。

停電時のことを考え、明かりを探しました。今は、手で発電するタイプもあります。選んだのは単 3 電池使用で、連続で 20 時間程度点灯する「LED ライト」。ぶら下げることが出来るものを選びました。これは両手が塞がるのを避けるためです。「単 3 電池」も 6 本 1 セットのものがあり購入。これで 3 日間は明かりには困らないでしょう。また、「ライター」も購入しました。燃やすものはバックの中に紙類が常に入っているので、それと木の枝等があれば屋外で暖を取ることもできます。

ここまでで 7 品。残りは 2 品です。

水やガス、電気が使えない場合、お風呂に入ることは困難です。しかし、清潔であることは大切です。そこで、手をふいたり、体をふいたりするように、「あかちゃんのおしりふき 80 枚入り」を購入。

最後の 1 品をどれにするか。悩んだあげく、小腹が空くことを考慮して、7 つに分かれている「お菓子（ボーロ）」を購入しました。

今回、全 9 品、972 円で揃えてみました。実

際に、やって見ると意外と難しかったです。100円ショップで揃うグッズ、揃わないグッズがあります。何でもかんでも購入するとなると、100円ショップと言っても、結構な額になります。

しかし､家にあるもの､常日頃のバックに入っているもの、普段、持ち歩いているもの、それらを頭に描きながら、かつ、災害時の状況をイメージしながら揃えてみることで、家に不足しているものなども見えて、良い経験となりました。皆さんも試してみては如何でしょうか。

（山﨑　裕行）

小倉祇園は太鼓だけではない。平松御神輿祭に参加してきました

●平松神輿とは？

平松神輿は、北九州市小倉北区平松町に江戸時代から受け継がれてきた由緒ある御神輿です。

毎年7月に開催されている小倉祇園祭では、「大漁」「五穀豊穣」「無病息災」「家内安全」を祈願して、小倉の街を巡幸し、祇園祭のメーンである競演大会では、太鼓の山車に先駆けて練りを披露します。

また、この平松御神輿の巡幸は、小倉祇園が近代化によって「太鼓祇園」が主となりつつある現在でも、江戸から明治にかけて町方が行ってきた「廻り祇園」の形態を残しており、高さ2.3ｍ、横幅2.0ｍ、重さ850㎏（本棒、横棒含む）の御神輿を前後左右6名ずつ、計24名で担ぎ､小倉の街を練り歩きます｡その際には、源平の時代、合戦に向かう武将の勇ましい姿を､独特の節回しと合いの手で歌った「口説（くどき)」が､御神輿の勇壮さを一層引き立てます。

学生時代、研究で平松町を初めて訪れたのが平成22年。その年の7月に初めて御神輿を担ぎ、疲労と熱中症と両肩の痛みでフラフラの状態で、終着点である地元の集会所に到着する直前、「やっと終われる、もう担ぎたくない」なんて思ったこともありましたが、気づけば8年目、今年も祭りに参加しています。

●長くて短い一日

祭当日、7月15日。天気は曇りながらも、最高気温は34度と、猛暑の中の開催となりました。

朝9時に集会所に到着。そこで朝食を頂き、法被に着替え待機。出発に備えます。

参加者は、地元の方に加え、九大・西工大・九工大の学生も参加し、総勢100名弱の大所帯です。

11時に神事が開始、八坂神社より来られた3名の神主により、御霊授受と神入れの儀式が執り行われます。

神事が終わり、お神酒を飲んだら、いよいよ出発。それぞれの棒につき、馬（神輿を担がないときに載せておく台のようなもの）を外し、「めでた～」口説きの開始と同時に、御神輿も進み始めます。

巡幸が始まると、最初は平松町内を練り歩きます。町内をゆったりと一周。そこから小倉市街に向けて歩を進めます。

市街までの道程は歩道がないところも多く、御神輿は基本的に車道を巡幸することになります。その際、後続車両や、交差点では全ての車両をストップすることとなり、交通整理の役割が重要となります。

私も数年前から、担ぎ手から交通整理に回るようになりましたが、これが思ったよりも大変。御神輿に先立ち車両を止め、御神輿の通過を待って全力疾走で、また先頭に戻ることになります。最初の頃は車を止めるタイミングなども難しかったのですが、今では慣れたことで少し余裕もでき、普段は体験出来ない車道の真ん中を御神輿とともに闊歩するという状況を楽しんだりもしています。

こうして通行中の方々にもご協力いただきながら、御神輿は八坂神社に到着します。ここで御神輿を八坂神社に入れて練り上げるのですが、御神輿の横幅に対して、入口が狭いこともあり、まっすぐには入れられません。その為、御神輿をほぼ45度に傾け楼門をくぐることになります。その姿は中々に迫力があり、無事にくぐり終えた時には、固唾をのんで見守っていた沿道の方々から喝采が上がります。

こうして八坂神社での奉納、昼食をはさんで

出発前の御神輿

御神輿の八坂入り。楼門を通すため、850kg の御神輿が 45 度に傾く。

からの競演会でのお披露目。その後に、再度八坂神社へ。最後の練り上げを行い、本殿へ御神輿を乗りいれ、神主により御霊が戻っていかれます。ここまでが終わると、いよいよ帰路につきます。約 5km の行程となります。

暑さと疲労で若干御神輿が低くなりつつも、もうひと踏ん張り。無事に今年も集会所へ戻ることが出来ました。

集会所へ戻るともう一つのお楽しみ。直会が始まります。直会では地元のお母さんたちに用意していただいた料理を食べ、ビールを片手に一日の疲れを癒します。ここで絶品なのは「関門海峡たこ」。関門海峡の速い潮流にもまれて育つことで身が引き締まり、豊富なえさを食べて育っていることから、噛めば噛むほど口の中に旨味が広がります。「関門海峡たこ」は平成 18 年に北九州漁協平松支所による商標登録、平成 21 年には平松、長浜、大里、旧門司及び田野浦の漁業者による「北九州関門海峡たこ協議会」が設立、資源とブランドの管理が行われています。

こうして御神輿の余韻に浸り、久しぶりに会った方々と話し、だんだんと夜が更け、家路に着いたのは 22 時を回った頃でした。

●御神輿の復活によるとコミュニティの再生

平松御神輿、その運営を行っているのは地元の平松町内会を中心とした「平松御神輿祭実行委員会」です。

この平松町、かつては、傘を差して歩けないと言われるほどの狭隘な路地が張り巡らされた密集市街地でした。その状況を改善するため、平成 6 年度から平成 17 年度にかけて北九州市による住環境整備事業が実施されました。

また、時を同じくして平松御神輿も担ぎ手や世話人の減少により、平成 6 年を最後に小倉祇園への参加が途絶えていました。

事業終盤、クリアランス整備によって維持が難しくなってきた地域コミュニティをいかに再生するか、そこが大きな課題であったそうです。その課題解決に向けて、交流を誘発する空間構成や住民自治組織の仕組みづくり等が図られ、姿を新しくした平松町にもコミュニティが再生し、平成 15 年には地元や漁協有志の方々により平松御神輿の巡幸も復活、昔と同様、神輿が再びコミュニティの中心となっているように感じます。

こうして、地元の方々の尽力により、再び動き出した神輿は、平松町だけではなく小倉祇園にも欠かせない存在であり、平成 22 年 3 月には北九州市指定無形民俗文化財「小倉祇園　平松の御神輿」に登録されました。

●来年の事を言えば…

今年の御神輿が終わって、はや 3 か月。記事を書きながら、早くも来年の御神輿に思いをはせています。というよりも、御神輿祭の翌日に、「来年の御神輿まで、あと…」等と考えている時点で、存分に御神輿に魅せられているなと、自分でも可笑しくなります。

中々、事前の準備までは参加できていないのですが、来年もせめて当日だけはと、決心を固めるのでした。　　（櫻井　恵介）

「実録　交渉の達人 －国際標準化 戦争秘録－」

著者：原田節雄
発行：日経ＢＰ社

昨年度、地域企業が国の支援によって新技術開発に取り組む事業「戦略的基盤技術高度化支援事業」の最終評価や中間評価をとりまとめる事業のお手伝いをした。この研究開発事業の成果を評価するピュアレビューアをお願いしたのが、本書の著者である原田節雄先生である。既に原田先生は 2008 年の「世界市場を制覇する国際標準化戦略―二十一世紀のビジネススタンダード 」など、国際標準化の第一人者として著名な方であり、レビューでは、技術の標準化の可能性、問題点などに関する評価をお願いした。標準化という言葉は、一般に知られているのは、長さや重さ、時間など、計量の単位である度量衡標準など、国際標準であり、国内だけの標準化もあるようだ。しかし、製品が国内外で使え、国産品が国境を越えていくほど経済活動が拡大し、人の移動が広がっていく社会においては、国際標準がきわめて重要なものとなっている。

本書では、ソニー勤務時代にこの「標準化」に深く関わられていた原田先生が、ソニーのフェリカ（JR 東日本の Suica）だけでなくデンソーの QR コードの国際標準化など、どういう戦いを行ってきたかが描かれている。

印象に残ったのは、『標準化の実務には、その技術の理解やプロセスの理解よりも重要なことがある。それが、「交渉、会議、闘争」と、それに伴うロビー活動である。』、『高度な交渉力には、人や組織の行動に関する深くて広い知識と経験に加えて、社会や文化の違いに関する理解が欠かせない。』この文章が、本書のテーマ『交渉』のキーを表していると感じた。

欧米企業に対して出遅れていた国際標準化を

目次
まえがき
第 1 部　交渉人修業時代
第 1 章　電子部品 CALS という受託事業
第 2 章　不思議な国家事業
ユニバーサル・リモコン
第 3 章　副業の翻訳で稼ぐ
第 2 部　欧米勢と激突する
第 4 章　技術渉外部の危機
第 5 章　デンソー QR コードの標準化作戦
第 6 章　交渉人もつらいよ
第 3 部　非接触 IC カード戦争の真実
第 7 章　SUICA ＝フェリカの孤独
第 8 章　見事に決まった裏技
第 9 章　最後の昇格－五七歳の夏
第 4 部　交渉人の達人
第 10 章　小型光ディスクフォーマット
第 11 章　IBM 対マイクロソフト
第 12 章　常識への挑戦
第 5 部　失敗しない交渉のコツ
第 13 章　取引材料の準備
第 14 章　マイノリティーを自覚する
第 15 章　失敗しない交渉手順チャート
あとがき

どのように「Suica= フェリカ」が勝ち取っていったのか、その戦いが克明に描かれている。最後に、「失敗しない交渉のコツ」が交渉成功の二二箇条で述べられている。

人と組織を動かすことの難しさ、失敗や成功がいくつも述べられているが、『どんな交渉でも、相手を否定してはいけないし、相手への思いやり（ギブ）を忘れてはいけない。交渉のキーは積極性と材料だ。』という言葉は、我々が仕事を進める上で、絶対に忘れてはいけない必須のことと感じた。　　（山辺　眞一）

「あなたの いるところが 仕事場になる」

著者：森本登志男
発行：大和書房

著者の森本登志男氏は、マイクロソフトにて公共営業本部シニアマネジャーなどを務められた後、2011 年からは佐賀県最高情報統括監（CIO）として 5 年間勤務された。また、2007 年から、総務省の地域情報化アドバイザーの委嘱を受けておられ、仕事で共に汗をかき、元気

づけ、励ましてこられた方である。

森本さんとは、マイクロソフト時代から、公私にわたり様々なプロジェクトをご一緒させていただいており、常日頃、森本さんの情熱が人や組織の思いに火を付け、個人が、組織が飛躍していく場面をいくつも見てきた。

この本については、森本さんが佐賀県庁の関係課の方々と共に、テレワークを全職員に導入していった様子をドキュメンタリーとして記した本なのかな？と思って読み出したが、良い意味で期待を裏切られた。読み終わって感じたのは、この本は、森本さんのこれまで10数年にわたり地域を盛り上げてきたご経験とネットワークをもとに書かれた、「地方における仕事づくりの戦略」に関する本だということ。

地方創生の一丁目一番地は、「地方における仕事づくり」であり、仕事が人口の流出に歯止めをかけ、新たな人の流れを呼び込み、創生を図るのが主なストーリーだ。

地方における仕事づくりの事例としては、例えば都会のIT企業などが福利厚生等の目的でオフィスを風光明媚な地方に置き、首都圏の労働力を地方に移管するとともに、地元住民の雇用も創出するというモデルがある。また、子育て・介護と仕事の両立を図るため、自宅のパソコンから会社のサーバーにアクセスしながら仕事を続けるという解決策がある。森本さんによると、こうした、「情報通信技術を活用した、場所や時間にとらわれない柔軟な働き方」の総称が、テレワークであり、この言葉で説明できるシーンは幅広い。そのため、この本には、佐賀県やカルビー㈱など、官民によるテレワーク導入の事例や、元気のある地方都市として注目を集める鯖江市・大館市など、森本さん自身が深く関わっている、活力ある地方都市の取り組みが幅広く紹介されている。

本書のメインテーマであるテレワークの導入事例については、「大規模災害発生時の業務継続体制の確保、20代・30代の職員の5割を占める女性職員の離職防止などの目的からテレワークの導入を図った佐賀県の事例」は、テレワーク導入に至る背景や経緯、実際に運用に至るプロセスや、運用の工夫、課題などが詳細に記載されており、これから導入を考えている人には参考になる。

個人的には、「バブル期に建てられ、6年間放置されていた岐阜県白浜町の物件に入居し、東京から移住したスタッフのワーク・ライフ・バランスや生産性の向上、地元住民の雇用拡大を実現した㈱セールスフォース・ドットコムの事例」は、九州の山間地・離島などでも実現できるのではと感じた。

地方自治体の、企画、人事、総務などのセクション、または移住対策担当者の方々をはじめとして、「情報通信技術を活用した雇用の場づくり」に関心がある人には、学ぶところが多い一冊だと思う。ぜひご購読をオススメしたい。

（原　啓介）

編集後記

頻繁に起こる大雨（集中豪雨）や地震に対し、「他人事」や「特別なこと」ではなく、「身近な事」として捉え、「備え」が当たり前となるにはどうしたらよいか。キーは「お手軽」と「組合せ」かなぁと思う今日この頃。（ひ）

全国の名酒100種類、おつまみは持参で飲み放題といったお店を所員全員で調査研究してきました。おちょこで飲むわけですが、ついつい飲み過ぎてしまう危ない店でもあります。（だ）

よかネット　No. 128　2017.10
（編集・発行）
㈱よかネット
〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町３番８号
福岡パールビル８階
TEL 092-283-2121　FAX 092-283-2128
http://www.yokanet.com
mail:info@yokanet.com
（ネットワーク会社）
㈱地域計画建築研究所
本社　京都事務所　TEL 075-221-5132
大阪事務所　TEL 06-6205-3600
東京事務所　TEL 042-501-2531
名古屋事務所　TEL 052-202-1411
㈱地域計画・名古屋